ヒアリング報告①

対馬の伝統文化を守り続ける学校と子どもたち

加藤 美帆

1. 阿連小学校に通っていた子どもたちへのインタビュー

2016 年春に廃校になったばかりの阿連（あれ）小学校（以下、阿連小）に通っていた子どもたちへのインタビューは、阿連小に集まり、児童 8 名と、立教大学の阿部治教授を中心に、対馬市役所職員の前田剛氏と、対馬実習に参加した学生 6 名の計 16 名で行った。インタビューは 1 時間程度行われ、その後子どもたちと大学生チームに分かれ、ドッチボールの対抗試合を行った。

インタビュー内容は主に四点に分けられる。一点目は、子どもたちの普段の一日の過ごし方、二点目は、現在子どもたちが通っている統合先の金田（かんだ）小学校（以下金田小）と阿連小の違い、三点目は、阿連地区の伝統文化について、四点目は家族以外の地域の大人たちと阿連小に通う子どもたちとの関わり方の変化である。

一点目の一日の過ごし方では、夏休みをどのように過ごしているか、どこで何をして遊ぶかなど、子どもたちの行動について質問した。夏休み期間、朝は早朝から学校でラジオ体操を行い、そのまま午前中は学校で勉強をし、帰宅後に昼食を食べ、その後、川に行って遊ぶ子どもが多かった。また、学校のお休み時間にはドッジボールをして遊ぶ子どもたちが目立った。

二点目の金田小と阿連小の違いとして子どもたちが最初に挙げたのは、統合されたことによって通学手段がバスになったことだった。阿連小に通っていた頃と比べ、金田小の夏休み期間に学校に通う頻度は減ったという。学校と近所の人との関わりの有無について質問を続けると、金田小では親が来るのは運動会と親子面接の時に限られていたが、阿連小では、地区の人たちや中学生が、運動会、授業参観の後のお菓子づくり、読書発表会、学習発表会など様々な行事に参加していたという。学習発表会では、地区の人が参観だけではなく、盆踊りのための浴衣の着付けを手伝ってくれたり、踊りの練習に付き合ってくれたそうだ。学校や集会場、公民館が練習場所として使われたという。阿連小は、地域の伝統文化を守ったり、地区の人々と子どもたちとの交流の〈場〉としての機能を持っていたことが窺える。

三点目の阿連地区の伝統文化に関しては、学習発表会で盆踊りを披露したことにまず話が及んだ。そこで習った盆踊りは阿連地区の伝統文化の「あや踊り」と呼ばれるもので、もともと 4、5 種類もあり、5 人で 1 時間以上、数日間、場所を移動しながら地区を踊り歩いていくものらしい。また、子どもたちがあや踊りの発祥についても教えてくれた。雷鳴（らいめい）神社という、阿連地区に古くからある由緒正しい神社で、雷鳴神社の神様が出雲の国に行っている間、お日照り様が阿連を守ってくれており、あや踊りの発祥は、そのお日照り様を阿連の子どもたちがにぎやかに送り出すことにあるという。子どもたちは

その知識について随分詳しく知っており、積極的に語ってくれた。地域の歴史や文化のことは、先生以外にも地元の人が教えてくれていたそうだ。

子どもたちは豊作に感謝する「亥の子」という阿連地区に伝わる伝統の歌がお気に入りのようで、四番まできちんと覚えていた。この歌は、地域の人ではなく、総合の時間に高学年から習うようだ。学校が地区の中で伝統を守り伝えていく役割を持つことを実感した。しかし、金田小の地区には亥の子の文化はないため、歌を口にしなくなってしまったらしい。前田氏によると、阿連のお日照り様の言い伝えは、対馬の中でも特殊だそうだ。阿連地区の子どもたちは自分の地域の伝統を自ら閉ざしてしまう方向に進んでいると感じた。しかし、子どもたちは阿連の好きなところ、自慢できるところは、昔からの伝統が続いているところだと話していた。

四点目の家族以外の人、地域の大人たちとの関わり方では、金田小に移ってから、地域の大人たちと学校で接する機会は少なくなったらしい。しかし金田小には金田小で、その地域の大人たちが、低学年に絵本の読み聞かせなどをしに来てくれるという。

以上から、地区が違うだけで文化は異なることを実感した。学校が一つなくなるということは、その地域の伝統文化を子どもたちに継承する機会を失わせかねない。学校以外で地域についての教育機会をつくることはなかなか難しいことなのかもしれない。

2. インタビューの考察

阿連小が廃校になったことは、子どもたちの中で、起きる時間や帰る時間がいつもより遅くなったり、スポーツクラスの回数が変わったりした程度の認識のようだ。しかし、「もし阿連小が復活するとしたら？」という質問を投げかけたところ、「復活してほしい！」と答えていた。阿連小が閉校すると聞いた時はやはり嫌だったそうだ。

子どもである時期はこの程度の認識だとしても、大人になり対馬以外の土地を知ったとき、自分の地域の伝統文化などについて深く知っていることは、故郷のアイデンティティを強く持つことやそれが自分の拠り所になることに繋がるのではないか。このことは阿連の盆踊りの大人たちの練習風景を見学した時に、島外から対馬へ帰ってきてこれを踊っている方の様子を見て、対馬とその人との結びつきの強さを感じたため、抱いた感想である。

また、対馬には高校が対馬高等学校、上対馬高等学校、豊玉高等学校の 3 校しかないため、高校進学を希望する子どもは、県外の高校に行くことが多い。だが、インタビューを通して一人暮らしが怖い、家が安心だといった理由で、将来県外の高校に行きたいと思っている子どもたちが阿連には少なく、島外へ行くことに関して消極的な意見を抱いていることが分かった。対馬以外の地域のことを知り、対馬を相対化してもっと自分たちの故郷への愛着やアイデンティティを強めることができたら、伝統文化はこれからも守られ継承されていくのではないか。

阿連小は廃校になったものの、未だに綺麗でイベントや集会などにも十分使えるような校舎で、廃校になったのがとてももったいないと思わせる場所であった。施設としては、十分活用できる状態であるが、それでも「廃校」というレッテルが貼られると一般の人はなかなか使用しようとは思わないだろう。メディアによる廃校の宣伝は全国で行われているが、TV で全国の廃校特集などといった企画で取り上げられるような PR 活動があれば、

注目が集まり、利用を名乗り出る人も現れるかもしれない。インターネットで話題になるような動画配信や､特集ページが組まれるような働きかけも宣伝効果があるのではないか。

また、校舎に残された発表の模造紙や教室のアレンジが加えられた看板などを見て、教員からの、校舎や生徒への愛を感じた。さらに生徒たちは、対馬に子どもが少ない分、教員だけでなく地区の大人にも大事な存在として育てられ、また自然に囲まれていることで元気に育っている印象を受けた。

3. 対馬実習に参加して

実際に対馬へ行ってみたことで、地方の魅力や首都圏居住者との暮らしの違いを実感することができた。前者は、子どもが少ない分、彼らは地域の大人に大事な存在として育てられること、また、自然に囲まれ、生活力、人間味豊かに、老若男女問わず主体的に健康的に暮していく環境があることだと考える。後者は、特に、家の近くにスーパーやコンビニがないこと､地域の人々と人間関係を築きあげていく過程が挙げられるだろう｡しかし、これらは表裏一体で、都会で「便利」と言われるものが近くにないからこそ、なるべく自分で野菜を育てていることで足腰が鍛えられて、首都圏にいる高齢者より、いきいきと暮らしている高齢者が多いと感じた。

また、今回の実習で大変お世話になった前田氏や一般社団法人 MIT の皆さんのように、移住された方が大変高い熱量を持って、地域づくりに励んでいる姿を目の当たりにし、首都圏で企業に就職することだけが生き方のモデルではないんだ、関わったことのない地域でも自分の居場所を構築できるかもしれないのだと､生き方を考える上でも刺激を受けた。

そのほかに、対馬の大人たちが子どもたちに大きな希望を持つことの理由の一つに、平和への思いもあげられると考える。8 月 9 日に対馬での熱心な平和学習を見学し、子どもたちの歌声を直接聞いたとき、大人たちが今後の世界をつくりあげていく子どもたちに希望を持つ気持ちが心底わかった。

また、対馬の大人たちが、対馬の子どもたちに自分たちのふるさとにもっと自信を持ってほしい、その魅力を発信していってほしいと強く願っていることが印象的だった。今回のインタビューでは、対馬の子どもたちと言っても小学生にしか会っていないが、彼ら、彼女らは地区の伝統の盆踊りについて質問すると、積極的に楽しそうに説明してくれたので、対馬のことが大好きなのではないかと感じた。しかし、教育委員会の方によれば、対馬の子どもたちは積極的な子は少ないそうだ。進学するにつれて島外に出る子どもたちが増えるためか、対馬に自信が持てない子どももいるようだ。外部から見るとこんなに素敵な自然や文化、大人たちに囲まれており、対馬の素晴らしさを感じたので、子どもたちにはその魅力を自覚してほしいと強く思った。

今回の対馬実習で私はすっかり対馬のファンになってしまった。そこで暮らす子どもたちには、学校を中心に、先生や地域の人たちから教えてもらった伝統文化や、自然に囲まれて育まれた健やかな環境に自信を持って、それらを心の拠り所として大事にして、継承していってほしい。また対馬の溢れる魅力を沢山の人に知ってほしいと強く願う。

（かとう・みほ　立教大学社会学部現代文化学科 3 年）